

リテリングを用いた授業内スピーキングテスト

The Retelling-Style Speaking Test in a Classroom Setting

杉内光成
獨協埼玉中学高等学校

Abstract

This paper reports the retelling-style speaking test conducted in a classroom setting. Many previous studies claimed the significance of speaking tests to assess and investigate students' speaking ability and showed that retelling could be one of the effective teaching methods to enhance students' speaking ability in a classroom setting. However, there is no previous study to focus on retelling-style speaking tests corresponding with what teachers have taught in the classroom. By referring to Sasaki (2020) and Ushiro (2009), retelling-style speaking tests were made and conducted for 2nd grades of senior high school. The report found significant gaps among classes from the average test scoring rate perspective. However, retelling-style speaking tests' washback was significant for students and teachers. As for the pedagogical implications, it is expected that students will likely change their attitude toward daily English classes. In addition, teachers can reflect on how they teach students English.

キーワード: リテリング, スピーキングテスト

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ
対象者とクラス人数	2022年度高校2年生 325人
学習の目標	現実世界に関連した教材の英文を通して、英語で読む力・聞く力・書く力・話す力という4技能の能力を養う。

1. はじめに

現在、学校教育の中で英語を学んでいる子どもたちは、グローバル化や AI 技術の急速な発達などにより、情報化やグローバル化が進展する社会を生きていくことになる。このような時代に、子どもたちは世界共通語として位置づけられている英語で自分の考えを発信したり、情報を整理して伝えたりする能力が求められるようになった。平成 30 年 8 月に告示された高等学校学習指導要領外国語編には、英語の授業の目標は「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力 (p. 155)」を育むことであるとされている。そのための言語活動の一つに「話すこと」があるが、これは「やり取り」の中で話すことと、人前などで「発表」するために話すことに分けられている。英語での「やり取り」とは、ある話題について相手に対して考えなどを話して伝え合うことを意味し、相手に対応しながら会話をすすめていくことが想定されるので、即興性が求められる。一方、「発表」とは情報や考えなどを論理性に注意しながら伝えることを意味しているため、ある一定の時間に何を話すかを準備することが求められる (文部科学省, 2018)。

学習指導要領で求められる能力を学習者が身につけられているかどうかを確認するための作業の一つとしてテストがある。以前は実施されることの少なかったスピーキングテストだが、「話すこと」を評価することが頻繁に行われるようになり、近年広まりつつある。

1.1 スピーキングテストの現状

スピーキングテストの導入には、様々な動きが散見される。スピーキング能力を測ることの重要性が高まり、2020 年度の高校 3 年生から英語の民間試験の導入が計画されていたが、新たに実施された大学入学共通テストで英語の民間試験は導入延期になった。また、高校受験では、2022 年度都立高校入試でスピーキングテストが実施されたり (中垣, 2021)。大学受験においては、国公立大学の二次試験においてスピーキング力の一端を測るテストを、条件付きで課すことが提案されている (廣江, 2022)。

では、学校で行われているスピーキングテストについてはどうであろうか。根岸 (2017) は、近年実施されているスピーキングテストの問題点として、他の技能 (「読むこと」「聞くこと」「書くこと」) のテストに比べて、教師がスピーキングテスト作成について知識や経験が乏しいことを挙げている。さらに、スピーキングテストの内容と採点という観点から分析していく必要があるが、指導者であり採点者である教員自身が分析するための術を知らなかったり、そのための時間を捻出できなかったりする。また、形式についてもダイアログなのかモノログなのか、実際のコミュニケーションの場面に基づくのか、ロー

ル・プレイなのかなど、どのようなスピーキング能力を測るのかによって決めていかなくてはならない。

最後に、学校で行われるテストで忘れてはならないのは、「教科書を通して育もうとした英語力」が身についているかどうかを測るという側面と、生徒へ与える影響のバランスである。定期テストや小テストなど学校で生徒に対して行われるテストは、生徒の学習への影響が大きいと考えられる（根岸, 2017）。よって、「教科書を通して育もうとした英語力」を測るために、生徒にとって全く初見のテストを行なうことは、学校の成績に関係するのであれば、よくも悪くも様々な「波及効果」を生じさせてしまう可能性があることを念頭に置きながらテストの作成ならびに実施をしなくてはならない。

1.2 リテリングの可能性

指導とテストの一貫性や採点のし易さ、生徒への波及効果などの問題を解決する指導法の一つとして、リテリングが有益であるとされている（卯城, 2009; 佐々木, 2020）。リテリングとは、佐々木（2020）によると「読んだり、聞いたりしたことを、何らかの補助的なメモ等を見ながら、第3者に伝えること（p. 3）」であると定義されている。卯城（2009）は、このリテリング指導とそれに関連する評価の利点として、まずシンプルかつ学習者に親しみやすいにもかかわらず、技能統合型の活動であるのでスピーキングを中心とした統合的な能力を測ることができることを挙げている。また、リテリングには様々な種類があり、学習者のレベルに応じて形式や方法を自由に変化させることができることにも言及している。さらにリテリング活動を通して、リーディング活動にも肯定的な影響を及ぼすことが期待できるとされており、統合的な能力の育成を目指す指導の1つとしても可能性を秘めている。

2. 先行研究と実践の目的

2.1 先行研究

リテリングの形式を用いたスピーキングテストは、すでに多くの学校現場で実践されており、様々な形で導入、研究されている（佐々木, 2020）。

平井（2011）は中高大のクラスにおいて、簡単に使用でき、実用性のあるリテリングを用いたスピーキングテストの研究と開発を試みた。このテストの特徴として、妥当性を確保しつつ、初級者のスピーキング能力を測定できる点を挙げている。さらに、さまざまな熟達度レベルを評価するために、EBB（Empirically derived, Binary-choice, Boundary-definition scales）を採用し、教員が生徒のパフォーマンスを一度聞く間に採点

できる高い信頼性のある評価尺度を完成させた。

また、平井（2015）ではストーリーリテリング・テストのバリエーションとその目的、ならびに実施手順を紹介している。ストーリーリテリング・テストの基本バージョンの手順として、以下の方法を紹介している。

Step 1. 提示されたストーリーを2分間で黙読する。

Step 2. ストーリーの内容に関する3、4個の問いに口頭で答える。

Step 3. テスト用紙を裏返し、キーワードを見ながら1分40秒で再話する。

Step 4. 再話の最後に、50秒間でそのストーリーの内容やトピックに関して感想や意見を述べる。

（平井, 2015, p. 56）

また、上記の基本バージョンに加えて、「音読バージョン」、「ターゲットありバージョン」、「意見交換バージョン」、「要約バージョン」を紹介している。

佐々木（2020）では、リテリングに関する3つの研究を紹介して、そこからリテリング指導に生かせることや、リテリング活動が学習者にどのような影響を及ぼしているかについて考察している。まず、リテリングを長期間行った情意面の変化について研究では、リテリングに対する動機の上昇が見られ、学習者の情意面に肯定的な影響を及ぼすことが報告されている。ICレコーダーを活用したスピーキング研究では、ICレコーダーを活用してリテリング指導を行ない、スピーキングにおける流暢さが高まることと、スピーキングに対する情意面に肯定的な影響を及ぼすことを示唆している。さらにリテリングを日本語で行う効果についての研究では、英語による筆記リテリングを行う前に、日本語による筆記リテリングを行うと、意味のまとまりであるアイデアユニットと総語数の両方において伸びが見られ、このことから日本語による筆記リテリングは英文筆記再生課題において肯定的な影響を及ぼすことが示唆できるとしている。

このように、上記の先行研究から、リテリングを用いたスピーキングテストは、テストの妥当性を確保しつつ、様々な熟達度レベルの学習者を対象にしてテストを実施でき、流暢さや情意面に肯定的な影響を及ぼすことが示唆されている。しかし、上記の研究で用いられたリテリング・テストは、生徒にとっては初見の内容を扱ったものであり、授業で学んだ題材と関連させた内容リテリング形式でテストをする研究はあまり散見されない。

2.2 実践報告内容

本実践報告では、授業の内容と一貫性を持ったリテリングを用いたスピーキングテスト

について、作成過程・実施方法・その結果という3点について報告する。

3. 授業の内容と一貫性を持ったリテリングスピーキングテストの作成の過程

3.1 使用教科書

コミュニケーション英語Ⅱで使用した教科書は *Revised LANDMARK English Communication* Ⅱ (啓林館) であり、10 個の Lesson で構成されている。本教科書は車いすテニスの国枝慎吾選手についてや、なぜ人は人を好きになるのかという身近なトピックから、硫黄島の戦いやサグラダ・ファミリアという日常生活とは離れたものなど多様なジャンルの英文を扱っている。本スピーキングテストは、Lesson 8 Edo: A Sustainable Society で実施した。Lesson 8 は江戸時代の生活において自然と実践されていた 3R (Reduce, Reuse, Recycle) に着目し、現代を生きる私たちにできることは何かを考えさせる内容となっている。

3.2 生徒

本スピーキングテストは高校2年生9クラス325名に実施した。生徒は全員日本での英語教育を受けており、帰国子女はいない。9クラスのうち、1組から5組は他の中学校から高等学校に入学した生徒(外部進学生:外進)で構成されており、1組は外進の中から学業成績上位の生徒が選抜されたクラスである。6組から9組は中学校から高等学校に内部進学した生徒(内部進学生:内進生)で構成されており、6組は内進の中から学業成績上位の生徒が選抜されたクラスである。7組から9組は3クラスが4分割され、7組から9組の中で英語の成績上位者で構成された「789Aクラス」と、Aクラスに所属していない7組の生徒のクラスを「7組B」、Aクラスに所属していない8組の生徒のクラスを「8組B」、Aクラスに所属していない9組の生徒のクラスを「9組B」としている。

3.3 教員

本スピーキングテストは高校2年生対象のコミュニケーション英語Ⅱを担当している5名の教員で実施した。教員Aは教歴11年目で2組・5組・6組・8組Bを担当しており、本科目のチーフを務めている。また、8組のクラス担任でもある。教員Bは教歴19年目であり、1組・4組・7組Bを担当し、4組のクラス担任でもある。教員Cは教歴5年目で3組を担当しており、3組のクラス担任でもある。教員Dは教歴12年目であり、9組Bを担当した。教員Eは教歴10年目で789組Aを担当した。

3.4 リテリングを用いたスピーキングテストまでの授業

本スピーキングテストを行なう前に、以下の流れを中心として授業を行った。なお、リテリング活動は、全ての Part で行なったわけでない。また、リテリングを行なった際は、以下の指導手順の (7) Activity で行なった。

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| (1) Warming Up | (5) Explanation |
| (2) Review | (6) Reading Aloud |
| (3) Oral Introduction | (7) Activity |
| (4) Model Reading | (8) Consolidation |

Lesson 8 は 5 つの Part で構成されていたが、リテリングを用いたテストに至るまでの指導計画が以下の通りである。

1 時間目 Part 1	4 時間目 Part 4 前半	7 時間目 Retelling 活動
2 時間目 Part 2	5 時間目 Part 4 後半	8 時間目 文法の復習
3 時間目 Part 3	6 時間目 Part 5	9 時間目 スピーキングテスト

3.5 スピーキングテストの内容

本スピーキングテストは、2 つの Questions から構成されている。1 つ目の Question では、教科書の挿絵を提示されたキーワードを使って説明するものである。これは、授業で学んだ内容を表している挿絵について、複数のキーワードを使いながら英文を作りあげて説明できるかをテストするための Question である。なお、キーワードは教科書出版社が作成した副教材データ（リテリング・シート）に明示されているキーワードの中から、授業担当で打合せをして抽出した。2 つ目の Question は、テストカードで指定されたパートに関連した質問に対して、自分の立場を表明し、その理由を述べるものである。なお、本スピーキングテストの形式は、佐々木（2020）を参考にした。

本スピーキングテストでは、Part 1 に関連したテストカードを 1 枚、Part 2 に関連したテストカードを 4 枚、Part 4 に関連したテストカードを 2 枚、Part 5 に関連したテストカードを 2 枚作成した。なお、Part 3 は挿絵とそれに付随するキーワードがリテリングを用いたスピーキングテストをする題材として、他の Part に比べて適切ではないと判断したため、テストカードを作成していない。

次に Lesson 8 の Part 1 の本文と、そのスピーキングテストを紹介する。

資料 1


Part 1 の教科書本文と *Speaking Test* で使用するテストカード

In Japan we throw away about 500 million tons of garbage per year, a tenth of which comes from households and offices. It means that we throw away about one kilogram of garbage for each person per day. In a society of mass production and mass consumption, we throw away a huge amount of garbage. In the near future, the day may come when we will have to live buried in garbage.

If you are interested in environmental problems, you may know the expression “3Rs.” It means Reduce, Reuse, and Recycle. It has been popular since it was introduced as the Basic Law for Establishing a Recycling-Based Society in 2000. Today, not only in Japan, but in other parts of the world, numerous measures have been taken to pursue a sustainable society. Surprisingly, people in the Edo period (1603-1867) actually achieved such a society. At that time, almost every resource was recycled, which reduced damage to the environment to a minimum.

Part 1

Q1. Explain the picture with key words.



The Edo period
sustainable
resource
recycle

Q2. Do you think recycling is important? Why?

(画像は *Revised LANDMARK English Communication II* より引用)

4. 授業の内容と一貫性を持ったリテリングスピーキングテストの実施方法

本スピーキングテストは、埼玉県内の私立中高一貫校において、高校 2 年生の必修科目であるコミュニケーション英語Ⅱの授業内 (50 分間) に、2022 年 11 月 22 日から 30 日にかけて 9 クラス 325 人を対象に行われた。生徒は事前にスピーキングテストの内容は知らされておらず、スピーキングテストの実施日のみ告知されている。

50 分の授業の中で、以下の流れにしたがって実施された。なお、テストは教室近くの廊下で実施し、生徒のパフォーマンスは各生徒が所持している Chromebook で撮影した。

- (1) Sample のスライド (資料 2 の 1 枚目) を見せながら、*Speaking Test* の方法を説明。
- (2) Lesson 8 *Speaking* 評価のスライド (資料 2 の 2、3 枚目) を見せながら、評価方法

を説明。

- (3) 生徒を 2 グループ（前半・後半）に分割し、各グループ内で 2 人 1 組を組ませる。
- (4) Speaking Test におけるパフォーマンスの撮影のポイントを説明。
- (5) 前半のグループが廊下に出て、1 人目に Test Card（資料 1）をランダムに配布。
後半のグループは教室で待機。
- (6) 1 人目は Test Card を見ながら 1 分間準備。ペアのもう一人は撮影の準備。
- (7) 1 分間 Speaking Test のパフォーマンスを撮影。
- (8) Test Card を教員に返却。もう片方の生徒が（5）から（7）を行う。
- (9) もう一人のテストが終了したら、後半のグループと交代。
- (10) 後半のグループも（5）から（8）を行う。


資料 2

生徒に Speaking Test を説明した際に使用しパワーポイントのスライド

1 枚目

Sample

Q1. Explain the picture with key words.



cleaning
passengers
a show
seven

Q2. Do you want to be the cleaning staff? Why?

2 枚目

Lesson 8 Speaking Test 評価

Accuracy : 言葉や文法の使用が適切か？
- おおね適切である…2点
- 適切であると判断しきれない…1点

Pronunciation : 発音は適切か？
- おおね適切である…2点
- 適切であると判断しきれない…1点

※ Accuracy や Pronunciation における「適切である」と判断しきれないのは、「評価者が1回聞いて意味が理解できない」状態になり、その原因が Accuracy または Pronunciation にあると判断されたということである。

3 枚目

Lesson 8 Speaking Test 評価

Q1
Contents1 : キーワードを使った文を用いて、イラストなどの説明が出来るか？
イラストなどの説明しているキーワード入りのセンテンス
1文につき…1点、※キーワードは4つあるので、合計4点
※キーワード半角数字の1文はキーワードの半角数字の数になる。

Contents2 : キーワードの1文などを用いて、イラストなどの説明が出来るか？
十分に説明できている…2点
- おおね説明ができていない…1点

Q2
Contents : 質問に対して自分の意見を述べ、その理由を説明できているか？
意見と理由が伝えられている…2点
- 意見しか伝えておらず理由がない…1点

（画像は *Revised LANDMARK English Communication II* より引用）

パフォーマンステストする際は、大きな声で、顔を出来るだけ近づけ、テストカードを見せながら行うように指示をした。この指示により、撮影しても声があまり聞こえないことや、どのテストカードのテストをしているのか分からない状況を回避することができる。

4.1 スピーキングテストの評価方法

本スピーキングテストで撮影した動画データは、Google Classroom というアプリケーションを通じて回収し、評価は次のルーブリック評価表（表 1）に基づいて行なった。なお、作成にあたっては佐々木（2020）、卯城（2009）を参考に筆者が作成し、その後、コミュニケーション英語 II を担当する教員で打合せを行なった。

表 1

ループリック評価表

	4 点	3 点	2 点	1 点	0 点
Q1: Contents① キーワードを使った文を用いて、イラストなどの説明が出来るか。	4 文以上ある。	3 文ある。	2 文ある。	1 文ある。	センテンスがない。
	2 点		1 点		0 点
Q1: Contents② キーワードのない文などを用いて、イラストなどの説明が出来るか。	十分できている。		あまりできていない。		説明がない。
Q2: Contents 質問に対して自分の意見を伝え、その理由を説明できているか。	意見と理由が伝えられている。		意見しか伝えておらず理由がない。		質問に答えていない。
Accuracy 語彙や文法の使用が適切か	おおむね適切である。		適切であると判断しかねる。		英語の内容が理解できない。
Pronunciation 発音は適切か	おおむね適切である。		適切であると判断しかねる。		英語の内容が理解できない。

Q1 は Contents の観点を 2 つに細分化した。Contents①はキーワードを使った文を用いて、イラストなどの説明ができていないかを評価した。一方、Contents②はキーワードのない文などを用いて、イラストなどの説明ができていないかを評価した。このように 2 つに分けたのは、キーワードを用いた文のみでリテリングをすることはできず、発話の流れを作ろうとするとキーワードのない文も必要となり、そのような発話も評価をすべきだと考えたからである。

Q1: Contents①において、キーワードを複数含んだ 1 文はキーワードの個数分の点数となる。Accuracy や Pronunciation における「適切であると判断しかねる」というのは、「評価者が 1 回聞いて意味が理解できない」状態になり、その原因が Accuracy または Pronunciation にあると判断されたということである。

実際にスピーキングデータを評価する前に、評価規準を確認し評価者によって誤差が出ないように、実際のスピーキングデータをいくつか用いて、スコアをつけて目線合わせを行なった。

5. 授業の内容と一貫性を持ったリテリングを用いたスピーキングテストの結果

リテリングを用いたスピーキングテストを以下の表 2 にまとめた。なお、テスト当日に欠席をした生徒は後日再テストを実施したが、再テスト受験者のスコアは除いて平均得点率を算出した。本実践報告における平均得点率とは、12 点（本スピーキングテストの満点）を 100%として、クラスの平均点を百分率で表した数値である。例えば、平均得点率が 50.0%ならば、クラスの平均点は 6.0 点ということになる。

表 2

スピーキングテストの平均得点率

	1 組	2 組	3 組	4 組	5 組	6 組	789A	7B	8B	9B
人数 (人)	35	33	30	31	33	41	25	29	23	28
平均得点率 (%)	74.5	74.7	69.6	66.7	65.4	73.4	77.5	52.2	50.0	35.3
標準偏差	1.38	2.22	1.86	1.79	2.12	2.40	1.49	1.63	2.04	1.63

平均得点率が一番高かったのは、789A の 77.5%であった。次に高かったのは、2 組の 74.7%で、1 組の 74.5%とほぼ同等の得点率である。6 組は 73.4%であり、平均得点率が 70%を超えたのは、この 4 クラスのみであった。平均得点率が 60%台であったのは、3 組の 69.6%、4 組の 66.7%、5 組の 65.4%である。50%台は 7B の 52.2%と 8B の 50.0%であった。9B は 35.3%しか平均的に得点をあげることができていなかった。

6. 考察

このスピーキングテストの結果は、部分的にはあるが、普段の定期試験などの成績と比較してみると、同じような結果になっている。例えば、定期試験では 1 組と 6 組の成績が高く、7B、8B、9B の成績が他クラスよりも低い傾向にあり、スピーキングテストの結果からも同様なことが言える。このような結果になった理由の一つとして考えられるのが、リテリングを用いたスピーキングテストは「学んだ英文の理解度」をスピーキングという形式で評価しているということである。まず、リテリングを行うためには授業で扱われた英文の内容や語彙、文法などを理解していることが必要である(卯城, 2009)。1 組から 789A は毎回の定期試験において、この点に関しては問題なく取り組んでいるが、7B から 9B は教科書本文の理解が十分にできない生徒が一定数いる。そのような状況でリテリングとい

う形で学んだ英文の理解度を評価されても、十分なパフォーマンスができない。

一方、2組と789Aの定期試験の成績は1組や6組よりもやや劣る傾向にあるが、スピーキングテストでは同等レベルの結果となっている。これは、2組や789Aにスピーキング形式のパフォーマンスに慣れている生徒が一定数いることや、そのような生徒がいることによって、「英語を話すことは恥ずかしいことではない。素晴らしいことだ」などという雰囲気クラスに創り出し、良い波及効果を与えているのではないかと考えられる。

7. 本実践から得られた効果と今後の課題

本実践から得られた効果としては、まず、英語の授業に対する生徒のモチベーションの向上である。授業の内容と一貫性を持ったスピーキングテストだったので、テスト後に「もっと授業をしっかりと受ければよかった」や「音読などの活動をもっと練習しておけばよかった」という感想が聞かれ、今後の授業に対する姿勢への良い影響が期待できた。根岸(2017)では、テストの波及効果について言及しているが、本実践においては、生徒にとって自身の英語学習の方法について振り返る有意義な機会になったことが推察される。

つぎに、教員が自身の授業について振り返る機会となったことである。本実践を行った科目も担当者は筆者を含めて5名であるが、スピーキングテストの結果を踏まえて自身の授業について真剣に振り返っていた。学校で行われるパフォーマンステストでは、事前に生徒にテストの内容を知らせて、生徒は事前に原稿などを準備して暗記するというケースが少なくはないと思われるが、本実践ではテスト内容が分からないまま生徒はスピーキングテストを受けることになるので、リテリングを用いたスピーキングテストという形で授業の理解度を確認することができた。以下は、各教員の本スピーキングを実践したことに対する雑感である。

〈教員 B〉

以前は事前にお題が知らされていたため、多くの生徒が翻訳アプリ等を使いながら暗記した文章を話したり、書いたりしていて、それを評価することに疑問を抱いていました。即興で *speaking* と *writing* のテストを行うことになり、彼らのよりリアルな英語をみることで良かったと思います。生徒達には普段から自力で英語を考える大切さを実感して欲しいです。

〈教員 C〉

生徒の理解度をよく見ることができた。普段の授業でリテリングをしていますが、サマリーをがっつき見ている生徒はやはりできていないなど感じる。生徒がどのように普段の授

業に取り組みば良いかのゴールがしっかりと見えたように思う。

〈教員 D〉

即興での発表活動に関しては、とにかく *Broken* な英語でも良いので発言しようとする生徒が多く見受けられた。授業の初めにいつもペアワーク・グループワークを行っているので、それらの活動とテストが上手く絡んでいけるように指導していくことが大切だと感じた。

〈教員 E〉

公平性、授業の理解度を見ることができるので良いです。担当する先生の準備は大変だと思います。

今後の課題としては、リテリングを用いたスピーキングテストとリーディングテストの結果の相関関係を探っていきたい。卯城（2009）によると、リテリング指導が深い読解につながる可能性を示唆しており、リーディング能力の向上が期待できる。またリテリング指導の形態とスピーキングテストの結果のつながりは、見過ごすことのできない点である。リテリング指導という枠組みにも、佐々木（2020）が示すように様々な指導方法がある。どのような教材にはどのようなリテリング指導が適切か、またはリテリング指導が適切な教材はどのようなものであるのかなど、テスト結果と絡めた実践を報告していきたい。

参考文献

- 卯城祐司（2009）『英語リーディングの科学—「読めたつもり」の謎を解く』 研究社。
- 啓林館編（2018）『Revised LANDMARK English Communication II』。
- 佐々木啓成（2020）「リテリングを活用した英語指導—理解した内容を自分の言葉で発信する」 大修館書店。
- 中垣芳隆（2021）「高校入試に「英語スピーキングテスト」」『大阪女学院大学・大阪女学院短期大学教員養成センター〈英語教育リレー随想〉』, 123, 1.
- 平井明代（2011）「学習へのプラスの波及効果を生む実用的スピーキングテストの研究・開発」 科学研究費補助金研究成果報告書。
- 平井明代（2015）「授業を活かすストーリーリテリング・テストの活用」『OTSUKA FORUM』, 33, 49–69.
- 根岸雅史（2017）『テストが導く英語教育改革「無責任なテスト」への処方箋』 三省堂。
- 廣江頭（2022）「個別学力検査におけるスピーキングテストの導入」『長崎大学教育開発推進機構紀要』, 12, 24–31.
- 文部科学省編（2019）『中学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編』。